

B型肝炎・C型肝炎の検査について

B型肝炎はB型肝炎ウイルス(HBV)という小さな病原体が血液などを介して感染し、肝炎(肝臓の炎症)をおこす病気です。新生児や乳幼児期のまだ免疫の働きが弱い時に感染すると、肝炎の症状(黄疸や肝機能障害)を呈さないままウイルスが血液や体液中に存在することがあります。この状態を症状がない状態でウイルスを持ちつづけているので無症候性キャリアといいます。ほとんどの場合、幼少時は何事も起こらずに経過しますが、大人になり免疫力が強まると今まで共存していたウイルスを排除する現象が起きます。これがB型肝炎の発症です。ウイルスはまれに完全に排除される場合もありますが、大部分はウイルスの遺伝子に変異が起こり姿かたちを変え、免疫機構を逃れた状態で再び共存し始めます。しかし再度の共存がうまくいかず、その後も肝炎が何年も続くと肝細胞の破壊が続くことになり、肝硬変、肝がんへとすすむといわれています。日本人のB型肝炎感染者の2%前後がB型肝炎ウイルスのキャリアといわれています。

お母さんがB型肝炎ウイルスに感染していると分娩時に血液を介して赤ちゃんに感染したり、生後の一般生活のなかで感染し、B型肝炎キャリアを作り出す危険性があります。これを防ぐためにまずお母さんがB型肝炎にかかっているかどうか検査をします。現在ではスクリーニング検査としてHBs抗原検査が公費負担(患者さんはお金がかかりません)で行われています。

C型肝炎はB型肝炎と同様にウイルスによって肝炎を起こす病気のひとつです。日本人の約2%に認められ、頻度の高い疾患です。20年から30年の経過をたどって、慢性肝炎、肝硬変、肝がんへと進行することがあるので定期検診が必要な疾患です。当院では妊婦さん全員にC型肝炎抗体検査を実施しています。